横浜市立 日吉台中学校　　学校評価報告書　　（ 令和 元 ～ 3 年度 ）

重点取組分野	令和 元 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①小中一貫教育推進ブロック授業研で全学級の授業公開を行うことを通して、授業づくりの視点を共有する。 ②「授業を見合う週間」と授業研究会を連動させ、持続可能な授業改善の方策を確立する。 ③新学習指導要領の全面実施に向けた準備スケジュールを組み、実施可能な取り組みから開始する	①小学校と中学校でお互いに授業を見合うことができ、協議会でも9年間の連続性を意識することができている。 ②学習指導部主導の「授業見合う週間」が設定され、持続可能な取り組みとなりつつある。 ③生徒による授業評価はまだ一部に留まっている	B
豊かな心	①一昨年度の70周年行事を通して、生徒の主体性が伸びてきている。引き続き、生徒会活動や学級活動を通じて、主体性を引き出し、協働する素晴らしさを体験させたい。 ②道徳の授業研究を深め、心の葛藤や多様な価値観に触れることにより豊かな経験をさせたい。	①生徒会朝会や文化祭等、生徒会が主体となって全体を盛り上げる企画を行えた。 ②生徒の「あいさつ」を促すために職員の意識を更に高めていく必要がある。 ③道徳の時間は学校全体で大切にし、計画的に行われている。	B
健やかな体	①体育祭や球技大会等の学年行事を意図的・計画的に行うことにより、生徒の運動や体力づくりに対する関心を高めたい。 ②体力向上と生涯スポーツの視点から部活動のあり方を見直し、計画的に取り組む。	①体育祭までのプロセスを丁寧に考え、生徒が主体的に取り組めるようになっている。熱中症対策等検討課題も多い。 ②体育の授業と行事を関連付けたり、部活動の取組を意識したりしながら進めている。	B
特別支援教育	①特別支援コーディネーター会議を機能的に行い、具体的配慮を検討し実践する。 ②スクールカウンセラーに授業を参観してもらい、特別支援が必要な生徒を専門的見地から早期に発見する。 ③特別支援教室（study room）を更に生徒の実態に合わせて運営できるように工夫・改善を行う。	①特別支援教室推進実践校として学校全体で特別支援教育に取り組む姿勢と意識が高まっている。 ②特別支援教室（study room）を生徒が活用することで不登校の防波堤になっている。 ③特別支援コーディネーターの専任化が課題である。	B
生徒の主体的活動	①朝会の運営や生徒総会の企画・運営を生徒が更に主体的に行えるように指導していく。 ②学年行事に生徒の主体的活動を取り入れ、思考力・判断力・表現力を育む。 ③グループワークなどを取り入れながら、協働しながら問題解決を図れるように指導を継続していく	①生徒会朝会や文化祭等、生徒会が主体となって全体を盛り上げる企画を行い、活動が活発になってきており、主体性と意欲が高まってきている。 ②学年全体でグループワークを意識した取り組みが進みつつある。 ③生徒の個性を認め、個に応じた表現が伸長	B
生徒指導	・教育相談を充実させ、生徒・保護者の思いに立った支援を心がけ、いじめ等の未然防止に全職員で取り組む。 ・生徒指導に対して、情報収集や教職員の連携を大切に、迅速な対応を行えるようにしていく。	①研修会等で資料をある程度活用できた。 ②毎朝のいじめ防止委員会は機能した。 ③要配慮生徒の一覧はさせされたが、適切な支援を行うまでは至っていない。 ④校内でのケース会議は機能し機関連携やチーム支援が行われている。	B
キャリア教育	・地域の方々の協力のもと、1年でまちの先生、2年で職場体験学習、3年で自分の今後の進路を考える進路学習を実施し、学年ごとに系統性をもった指導を行っていく。	①キャリア教育の推進は重要と考えているが、職業体験学習は地域との連携を図りながら、400人の生徒の受け入れ先を更に開拓していく事が課題である。	B
地域連携	・地域行事への参加を計画的に行うよう、情報収集に心がけ多くの生徒職員が関わっていきます。 ・台中づくり懇話会を実施し、学校運営に生かしていき ます。	①例年通りの地域との取組は協力できた。 ②今後大規模な学校、大きな校区の学校であるので地域のすべての願いをかなえる事が難しいが、防災教育等、地域と一緒に考えていかなければならない課題も散見する。 ③台中づくり懇話会を協議会に変更していく為の検討も必要である。	B
いじめへの対応	①スクールカウンセラーの授業参加等の活用により、生徒の状況を的確に把握する。 ②毎朝、短時間のいじめ防止委員会を更に機能化する。 ③生徒指導上、配慮が必要な生徒のリストを作成し、共有化を図った上で具体的な支援を行う。④生徒と教職員のコミュニケーション（あいさつ→会	①研修会等で資料をある程度活用できた。 ②毎朝のいじめ防止委員会は機能した。 ③要配慮生徒の一覧はさせされたが、適切な支援を行うまでは至っていない。 ④校内でのケース会議は機能し機関連携やチーム支援が行われている。	B
人材育成・組織運営（働き方改革）	①月１回の「仲塾」を更に機能化し、持続可能な取り組みとし、教員の力量が向上している。 ②毎朝の校長室でのリーダー会議を更に機能化し、リーダーの主体性を引き出し課題解決に取り組んでいる。 ③コミュニケーションの活性化を徹底し、即時性・適時性を重視した助言を行い問題解決力を向上	①メンターチームが「仲塾」として持続可能な取り組みを目指している。マンネリ化しない工夫も必要と考える。 ②学年主任・専任・養護教諭・生徒指導部長・管理職での打ち合わせを毎日行っており、適時性を重視した内容の協議が行われている。 ③更なる校内組織の見直しが求められる。	B
ブロック内評価後の気付き	○毎日のいじめ防止委員会や要配慮生徒の把握ができているなど、日々の取り組みが評価できる。 ○特別支援教育推進実践校としての取り組みが効果を上げている。必要に応じて小学校との情報交換をするなどの対応も充実するとよい。 ○各学校が体験的な活動を取り入れ、系統的なキャリア教育ができていることは、大規模校であることを考慮すると職員の努力が見てとれる。 ○今後は、地域人口が飛躍手に気多くなる、「あいさつ」に関しては台中ブロック全体で長年取り組んで		
学校関係者評価	・学校が更に大きくなっていく中で、一人ひとりの生徒を大切に教育を続けて欲しい。 ・登校生徒や悩みのある生徒へ寄り添う指導を引き続き組織的に取り組んでいけると良い。 ・地域との連携も継続して推進して欲しい。 ・教職員のみなさんが一生懸命取り組んでいることは伝わってくるが、ワークライフバランスも考え、疲弊しないようにしてほしい。		
中期取組目標振り返り	・「いじめ」への取組は組織的に行われるようになってきている。来年度は生徒自身による「いじめ」への取組を考えさせたい。 ・生徒会朝会や文化祭等で生徒が主体的に取り組むことができた。これからも生徒にとって楽しい学校を追求し、更に生徒が自己有用感を高められる場を創造していきたい。 ・授業改善は常に全教職員が意識して、新学習指導要領を見据えて取り組んでいきたい。		

重点取組分野	令和 2 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①小中一貫教育推進ブロック授業研で全学級の授業公開を行うことを通して、授業づくりの視点を共有する。②「授業を見合う週間」と授業研究会を連動させ、持続可能な授業改善の方策を確立する。③新学習指導要領の全面実施に向けた準備スケジュールを組み、実施可能な取り組みから開始する	①コロナ禍で実施できなかった。次年度も難しい状況と思われるが、つながりは維持していきたい。 ②学習指導部主導の「授業見合う週間」が設定され、持続可能な取り組みとなりつつある。 ③生徒による授業評価はまだ一部に留まっている	C
豊かな心	①生徒の主体性を伸ばすように引き続き、生徒会活動や学級活動を通じて、主体性を引き出し、協働する素晴らしさを体験させたい。 ②道徳の授業研究を深め、心の葛藤や多様な価値観に触れることにより豊かな経験をさせたい。	①コロナ禍で例年通りの生徒会活動が難しい中、放送を駆使して、様々な企画を実施した。特に医療従事者支援メッセージ作成やセイブザチュルドレンへの寄付等今だから必要な事を行えた。 ②生徒の「あいさつ」を促すために職員の意識を更に高めていく必要がある。	B
健やかな体	①体育祭や球技大会等の学年行事を意図的・計画的に行うことにより、生徒の運動や体力づくりに対する関心を高めたい。 ②体力向上と生涯スポーツの視点から部活動のあり方を見直し、計画的に取り組む。	①コロナ禍で体育祭は、中止とした。次年度も生徒が主体的に取り組めるように計画をし、今年度設置したミストも活用しながら、次年度も熱中症対策等を考えながら実施予定。 ②体育の授業と行事を関連付けたり、部活動の取組を意識したりしながら進めている。	C
特別支援教育	①特別支援コーディネーター会議を機能的に行い、具体的配慮を検討し実践する。②スクールカウンセラーに授業を参観してもらい、特別支援が必要な生徒を専門的見地から早期に発見する。③特別支援教室（study room）を更に生徒の実態に合わせて運営できるように工夫・改善を行う。	①特別支援教室推進実践校として学校全体で特別支援教育に取り組む姿勢と意識が高まっている。 ②特別支援教室（study room）を生徒が活用することで不登校の防波堤になっている。 ③特別支援コーディネーターの専任化が課題である。	B
生徒の主体的活動	①朝会の運営や生徒総会の企画・運営を生徒が更に主体的に行えるように指導していく。②学年行事に生徒の主体的活動を取り入れ、思考力・判断力・表現力を育む。③グループワークなどを取り入れながら、協働しながら問題解決を図れるように指導を継続していく。	①コロナ禍で活動が制限されている中で、できる限りの事を工夫して実施した。次年度も、生徒会朝会や文化祭等、生徒会が主体となって全体を活動を継続させたい。 ②学年全体でグループワークを意識した取り組みが進み始めていたのだが、現在は自粛の状態である。	C
生徒指導	・教育相談を充実させ、生徒・保護者の思いに立った支援を心がけ、いじめ等の未然防止に全職員で取り組む。 ・生徒指導に対して、情報収集や教職員の連携を大切に、迅速な対応を行えるようにしていく。	①研修会等で資料をある程度活用できた。 ②毎朝のいじめ防止委員会は機能した。 ③要配慮生徒の一覧はさせされたが、適切な支援を行うまでは至っていない。 ④校内でのケース会議は機能し機関連携やチーム支援が行われている。	B
キャリア教育	・地域の方々の協力のもと、1年でまちの先生、2年で職場体験学習、3年で自分の今後の進路を考える進路学習を実施し、学年ごとに系統性をもった指導を行っていく。	①キャリア教育の推進は重要と考えているが、今年度は、コロナ禍で地域の方との交流ができにくい状況にあった。 　また、継続課題として職業体験学習では400人の生徒の受け入れ先を毎年開拓し続けていく事に教員の負担が大きくある。	C
地域連携	・地域行事への参加を計画的に行うよう、情報収集に心がけ多くの生徒職員が関わっていきます。 ・台中づくり懇話会を実施し、学校運営に生かしていき ます。	①コロナ禍で一切の地域行事が中止となり、つながりの少ない1年間であった。 ②今後大規模な学校、大きな校区の学校であるので地域のすべての願いをかなえる事が難しいが、防災教育等、地域と一緒に考えていかなければならない課題も散見する。 ③台中づくり懇話会を協議会に変更していく為	C
いじめへの対応	①スクールカウンセラーの授業参加等の活用により、生徒の状況を的確に把握する。②毎朝、短時間のいじめ防止委員会を更に機能化する。③生徒指導上、配慮が必要な生徒のリストを作成し、共有化を図った上で具体的な支援を行う。④生徒と教職員のコミュニケーション（あいさつ→会話→対話）を徹底させる	①研修会等で資料をある程度活用できた。 ②毎朝のいじめ防止委員会は機能した。 ③要配慮生徒の一覧はさせされたが、適切な支援を行うまでは至っていない。 ④校内でのケース会議は機能し機関連携やチーム支援が行われている。	B
人材育成・組織運営（働き方改革）	①月１回の「仲塾」を更に機能化し、持続可能な取り組みとし、教員の力量が向上している。②毎朝の校長室でのリーダー会議を更に機能化し、リーダーの主体性を引き出し課題解決に取り組んでいる。③コミュニケーションの活性化を徹底し、即時性・適時性を重視した助言を行い問題解決力を向上させる。	①メンターチームが「仲塾」として持続可能な取り組みを目指している。マンネリ化しない工夫も必要と考える。 ②学年主任・専任・養護教諭・生徒指導部長・管理職での打ち合わせを毎日行っており、適時性を重視した内容の協議が行われている。 ③更なる校内組織の見直しが求められる。	B
ブロック内評価後の気付き	○毎日のいじめ防止委員会や要配慮生徒の把握ができているなど、日々の取り組みが評価できる。 ○特別支援教育推進実践校としての取り組みが効果を上げている。必要に応じて小学校との情報交換をするなどの対応も充実するとよい。 ○各学校が体験的な活動を取り入れ、系統的なキャリア教育ができていることは、大規模校であることを考慮すると職員の努力が見てとれる。 ○今後は、地域人口が飛躍的に多くなる。「あいさつ」に関しては台中ブロック全体で長年取り組んでき		
学校関係者評価	・各教科の年間計画達成、教科指導の計画や実際、体験活動や個別支援指導の配慮や改善が充実している。 ・いじめ、暴力防止への対応を組織的行い、教職員が一人で抱えないような取組がされている。 ・特別支援教育の重要性とその組織的な運営がそれぞれの学校で課題となっている。 ・地域連携では、小学校の地域防災に中学生の参加ができないだろうか、これからの防災教育を考える上で連携が必要と思われる。		
中期取組目標振り返り	・「いじめ」への取組は組織的に行われるようになってきている。来年度は生徒自身による「いじめ」への取組を考えさせたい。 ・生徒会朝会や文化祭等で生徒が主体的に取り組むことができた。これからも生徒にとって楽しい学校を追求し、更に生徒が自己有用感を高められる場を創造していきたい。 ・授業改善は常に全教職員が意識して、特に次年度より新学習指導要領が始まり、評価を含め新たな観点での取組が求められる。		

重点取組分野	令和 3 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①小中一貫教育推進ブロック授業研で全学級の授業公開を行うことを通して、授業づくりの視点を共有する。②「授業を見合う週間」と授業研究会を連動させ、持続可能な授業改善の方策を確立する。③新学習指導要領に基づいて、「指導と評価の一体化」を推進する。	①授業公開を行うことはできなかったが、教科・領域研修で、各校の実態、授業づくりの視点を共有できた。②「授業を見合う週間」を月間として授業フィードバックを実施し、持続可能な授業改善の取り組みを行った。③指導と評価の一体化に向けて、教科会、研修の機会をもった。	B
豊かな心	①生徒の主体性を伸ばすように引き続き、生徒会活動や学級活動を通じて、主体性を引き出し、協働する素晴らしさを体験させたい。 ②道徳の授業研究を深め、心の葛藤や多様な価値観に触れることにより豊かな経験をさせたい。	①コロナ禍のため、学校生活において様々な制限がありましたが、生徒会や各学年等でできることを工夫し、生徒の主体性を引き出せるような取り組みを行った。 ②学校全体で道徳の時間を大切にし、生徒の実態を考えながら計画的に行った。	B
健やかな体	①体育祭や球技大会等の学年行事を意図的・計画的に行うことにより、生徒の運動や体力づくりに対する関心を高めたい。 ②体力向上と生涯スポーツの視点から部活動のあり方を見直し、計画的に取り組む。	①6月に体育祭を実施した。コロナ禍で学校生活に制限がある中で子供たちの体力の低下は著しい。次年度も行事等を通じて運動や体力づくりの関心を高めたい。 ②部活動に関しても活動日や時間の制限があるが限られた中で計画的に進めている。	B
特別支援教育	①特別支援コーディネーター会議を機能的に行い、具体的配慮を検討し実践する。②スクールカウンセラーに授業を参観してもらい、特別支援が必要な生徒を専門的見地から早期に発見する。③特別支援教室（study room）を更に生徒の実態に合わせて運営できるように工夫・改善を行う。	①月に一度のペースで、コーディネーター会議を開催し、具体的配慮を検討し共通理解を図った。②本年度はできなかったが、スクールカウンセラーに授業を参観もらう機会をつくり、特別支援が必要な生徒を専門的見地から早期に発見につなげていきたい。③職員会議で毎回、特別支援教室（study room）の利用者の状況を共通理解してもらう機会を得て、コーディネーターを中心に全教職員の協力のもと、生徒の実態に合わせて運営できるように工夫・改善を行った。	B
生徒の主体的活動	①朝会の運営や生徒総会の企画・運営を生徒が更に主体的に行えるように指導していく。②学年行事に生徒の主体的活動を取り入れ、思考力・判断力・表現力を育む。③グループワークなどを取り入れ、協働しながら問題解決を図れるように指導を継続していく。	特別活動全般でICTを活用した主体的な活動が顕著にみられた。①生徒会活動では映像を通じて全校生徒へ積極的に情報発信できた。②特別活動では、活動内容をデータ共有し、表現力等を育んだ。③学級活動ではオンライン授業などを通じ、協働しながら班活動を進めることができた。	B
生徒指導	・教育相談を充実させ、生徒・保護者の思いに寄り添った支援を心がけ、いじめ等の未然防止に全教職員で取り組む。 ・生徒指導に対して、情報収集や教職員の連携を大切に、迅速な対応を行えるようにしていく。	①研修会等で資料をある程度活用できた。 ②毎朝のいじめ防止委員会は機能した。 ③要配慮生徒の一覧はさせされており、SCなどと連携をしながら適切な配慮について検討した。 ④校内でのケース会議は機能し機関連携やチーム支援が行われている。	B
キャリア教育	・地域の方々の協力のもと、1年でまちの先生、2年で職場体験学習、3年で自分の今後の進路を考える進路学習を実施し、学年ごとに系統性をもった指導を行っていく。	①今年度もコロナ禍の影響2年生の職場体験学習が実施できない状況にあった。今後1, 2年生合同でまちの先生を実施する方向でいる。3年生では、進路学習を実施し、自らの将来について考える機会を持った。今後、コロナ禍が落ち着いたときに従来の系統性をもった指導を行えるように準備することが今後の課題となる。	B
地域連携	・地域行事への参加を計画的に行うよう、情報収集を心がけ、多くの生徒・教職員が関わっていく。 ・台中づくり懇話会を実施し、学校運営に生かしていく。	①昨年と同様に、コロナ禍でほとんどの地域行事が中止となったが、陶芸教室が地域の方と教職員、生徒が関わる機会となった。 ②学校評価、学校づくりアンケートに対して、台中づくり懇話会の際に地域の方々から意見を伺い、学校運営に生かした。また、懇話会を協議会に変更していく為の検討を進めた。	B
いじめへの対応	①スクールカウンセラーが授業を参観するなどして生徒状況の把握に一層努める。②毎朝のいじめ防止対策委員会を更に機能化させる。③生徒指導上配慮が必要な生徒のリストを作成し共有化を図り、具体的な支援を行う。④生徒と教職員のコミュニケーション（あいさつ→会話→対話）を徹底する	①研修会等で資料をある程度活用できた。 ②毎朝のいじめ防止対策委員会は機能した。 ③要配慮生徒の一覧は共有されていて、内容を検討しながら適切な支援につなげている。 ④校内でのケース会議は機能し機関連携やチーム支援が行われている。	B
人材育成・組織運営（働き方改革）	①月１回の「仲塾」を更に機能化して持続可能な取組とし、教員の資質・能力の向上を図る。②毎朝の校長室でのリーダー会議を更に機能化してリーダーの主体性を引き出し、課題解決に取り組む。③傾聴を心掛け、教職員の想いや考えを最大限尊重しながら、良さを認めて「任せて褒めて伸ばす」ことを実践する。	①メンターチームが有効に機能し、資質・能力及びメンタルヘルスの向上が見られた。②毎朝の学年連絡会がミドルリーダーの育成にもつながっている。③業務の効率化の推進と傾聴を大切にした教職員が「やりがい」を感じられる学校運営をさらに進めていく。	B
ブロック内評価後の気付き	○各教科・領域において新学習指導要領に基づいた授業づくり及び指導と評価の一体化を目指し、校内の組織を活用した取組や研修を通して授業改善を持続可能な形で行っていく素地を確立させている。 ○生徒指導・いじめへの対応については、いじめ防止対策委員会やケース会議、職員間の情報交換が十分に行われていた。特別支援教育においても組織的な個に応じた支援を検討・実践している。 ○全体を通して、組織的に取り組むことを目指し、着実に成果を挙げているので、具体的な取組を立案・実践していく中で、効果と課題を自己評価及び他者評価から分析し、次のステップに活かしていくことが		
学校関係者評価	・コロナ禍により様々な制約がある中で、学校が生徒及び保護者の安全と安心を心掛けながら、教育活動を丁寧に行っていることは評価できる。インターネット配信、生徒一人ひとりが使える端末等をさらに活用し、なるべくポジティブな気持ちでコロナを乗り越えてほしい。 ・コロナ禍だからこそ睡眠や食事等の基本的生活習慣を大切にし、健康的な中学校生活がより一層は図られることを期待している。 ・学校教育目標「共に生きる」の具現化に向けて、生徒に考えさせる取組を強化してほしい。		
中期取組目標振り返り	・「いじめ」防止への取組は組織的に行われている。来年度は、教職員及び生徒が学校教育目標「共に生きる」をより強く意識し、主体的に考え、行動することをとおして人権意識の向上を図る。 ・コロナ禍にもかかわらず、生徒は様々なことに主体的に取り組むことができた。これからも特別活動を充実させ、生徒が学校生活を楽しみ、自己有用感を高められるようにしていきたい。 ・全教員が常に授業改善を心掛け、新学習指導要領に基づく「指導と評価の一体化」をさらに推進し、生徒の「学びに向かう力」の向上を図りたい。		